

## グループ・アプローチと教員養成 —自己と出会う体験の提供—

### Application of the Group Approach in Vocational Education by an Educational Psychology Department

花 屋 道 子\*

Michiko HANAYA\*

#### 【論文要旨】

教職をはじめとする対人援助職を志望する学生を対象に、集中的エンカウンター・グループ合宿を実施した。終了時に回収したアンケート結果の分析により、参加者の多くがグループ体験を通じて、自己の新たな側面についての発見をしていることが明らかになった。課題そのものの効果として、もしくは課題を通じて他者と関わる体験により、それまで有していた自己イメージや価値がいったん崩されて危機に直面し、その後再構築されて自我同一性の達成へと向かうために必要な機会を、大学における対人援助職の職業教育の中に用意する意義について考察する。

キーワード：対人援助職 職業教育 エンカウンター・グループ

#### I 問題と目的

臨床心理士や福祉職などの対人援助職は、近年若者に人気の職業となっている。臨床心理士養成指定大学院の設置は、平成10年度に院生の受け入れを開始してから年々増加の一途をたどり、平成15年5月時点で103にのぼる全国の国公立大学大学院が指定を受けるに至っている。指定大学院の増加とともに募集定員も全国的に増えていることになるが、それにもかかわらず、入試の倍率が数倍から数十倍に達するといったことも決して珍しいことではないようである。教員もまた、児童生徒に教育を授けるとともに、その健全な発達を援助するという意味において、対人援助職の一つと言って差し支えないと思われるが、特にここ数年かつてない採用率の低迷のために、卒後すぐ教職に就くことのできない者が増えている。大学の志望者数は、通例、卒後の就職率の影響を大きく受けるものと考えられるが、現時点で志望者数そのものが劇的に低下する事態にまでは至っていないように思われる。

対人援助職の志望動機としては愛他的な動機が挙げられることが少なくなく、これらの多くは社会的に望ましいとされているために、進学先を選

ぶにあたってこのような志望そのものが周囲の親や教師から問題視されることは比較的少ない。このため、援助者としての自分自身の適性を充分に吟味することなく、自分を取り巻く社会における望ましい価値を自分自身の価値として取り込み、なら矛盾や心理的危機を経験しないまま受験に臨む学生も少なからず見受けられるのが現状である。

対人援助は援助対象者と援助者の関係性を活用する営みであるがゆえに、良心的な援助者として援助対象者との関係を見つめようとすると、援助者である自分自身を直視することを避け得ない。この意味で、これまでの維持してきた自己イメージが崩れるような体験を避け、入学以前からの固い志望を一貫して抱き続けながらやみくもにその実現をめざすことと、真のよき援助者を目指すこととの間には矛盾があると考えられる。

弘前大学教育学部心理学科教室の所属学生には、教員や心理系公務員などの心理専門職を志望するものが多い。このため、心理学科教室では従来から、学生にこれまでの自己イメージと整合しない自己の新しい面の発見や、他者との関係の中で自己を見つめ直す機会を提供することを、対人援助

\* 弘前大学教育学部心理学科

Department of Educational Psychology, Faculty of Education, Hirosaki University

職養成機関の任務の一つとして重視してきた。この考え方のもとで実施されているのが、平成11年度から継続的に行われている心理学科エンカウンター合宿である。

ロジャーズ, C.R. (1970) が提唱したエンカウンター・グループは、小集団での人との出会いにより、参加者の人間的成長を促すことを狙いとする集団活動である。狭義のエンカウンター・グループは、ロジャーズに端を発するベーシック・エンカウンター・グループ（非構成的エンカウンター・グループとも言う）を指し、国公立大学の学生相談臨床では20年以上前から導入されている。近年では、予めセッション中に行う課題やエクササイズが用意されている構成的エンカウンター・グループの実践も盛んに行われており、このような手法が学校教育の現場でも取り入れられている。

小柳 (1991, 1999) は、現代社会におけるエンカウンター・グループの機能として、①人と知り合うことを楽しむ場、②充実した無為を楽しむ場、③自分を表現し、人から反応をもらう場、④自己探求・自己変容の容器（るつぼ）の四つを挙げている。心理学科エンカウンター合宿では、上記の①～③の機能によって研究室集団内の交流活性化を図るに加え、③及び④の機能によって教員・心理専門職などの対人援助職を志望する学生に、自己の新しい面に出会った際の戸惑いや揺さぶられ体験、及び、グループの中で他者を支えたり他者に支えられたりする体験を提供することを目的に、合宿プログラムを企画・実施してきた。本稿では、X年度に実施したエンカウンター合宿の取り組みを紹介するとともに、合宿終了時に実施した質問紙調査の結果をもとに、グループ体験が対人援助職養成に果たす役割について考察する。

## Ⅱ 方 法

### 1) 日程及び実施場所

X年5月末に1泊2日の日程で、ロマントピア そうま（弘前市隣接村の公営施設）のコテージと会議室、計10室を会場として借り切って実施した。

### 2) 参加者募集方法

年度当初のガイダンスにおいて心理学科教室の全構成員を対象に、「自分や他者についてもっと知りたいと思う人にはお勧め」「特に将来『対人関係』職を目指す人にとってはこのような体験も不可欠」といった、参加を動機づけるメッセージと

もに合宿実施計画を周知した。さらに後日、期日・場所・費用に加え、エンカウンター合宿であること、「自己発見」「他者発見」「新たな出会い」を参加者の獲得目標とすることなど、詳細な情報を盛り込んだ募集案内を配布した。

### 3) X年度合宿プログラムの特色

X-1年度エンカウンター合宿参加者の感想の分析から、①課題からどのような資源を引き出すかは参加者によって異なること、②課題に対する評価も参加者によってまちまちであり、同一の課題に対して「物足りない」とする参加者と「重い」「苦しい」とする参加者とが混在することが明らかとなった（花屋ら, 2002）。そこで、X年度合宿プログラムでは、「遊びの要素を含んだ課題を通して、他者との交流の楽しさを体験するとともに、自分を取り巻く世界や関係性の中の自己に気づくことを目指す」交流系課題グループ（以下、交流群）と、「自分自身の内面や生き方について掘り下げる課題を通して、自己の見つめ直し、より深いレベルでの他者との交流を目指す」洞察系課題グループ（以下、洞察群）の2種類のプログラムを用意し、事前アンケートで参加者の実状と大まかなニーズとを把握した上で参加者を各プログラムに割り振って並行実施した。

これら2種類のプログラムは、接近の仕方こそ多少異なるものの、いずれもこれまでの自分のありようを見直し、自己の未知の側面を発見することを促すという点では、共通の目標に向けて参加者を動機づけるものである。また、研究室集団全体としての凝集性を高めることも合宿の目的の1つであるため、2種類のプログラムが最初と最後の課題では合同実施される構成となっている。

### 4) 参加メンバーとファシリテーター

参加希望者をサブグループごとにとりまとめ、最終的な全プログラムへの皆勤参加者数は、副専攻学生19名、主専攻学生12名、大学院生6名、心理臨床研修員1名、及び教員5名の計43名となった（都合により皆勤でなかった学生が副専攻学生に4名、主専攻学生に1名いたが、分析から除外している）。皆勤参加学生・院生37名のうち、20名が前年度のエンカウンター合宿を含め、グループへの参加経験を有している。

大学院生6名と心理臨床研修員1名、及び教員2名がスタッフとして合宿プログラムの作成・運

営にあたり、30時間超を費やすミーティングを5週間にわたり行って、エンカウンター課題の選定等の準備を行った。実際の合宿プログラムの中では、このスタッフ9名が7つのグループに入り、ファシリテーターとして行動した。7グループ中2グループにはファシリテーターが2名入り、課題ごとにファシリテーターとコ・ファシリテーターを交代する形でグループ運営を行った。

### 5) 事前アンケート

X-1年度のアンケート結果より、課題からどのような成果を得るかは参加者によってまちまちであり、参加者間で各々の課題に対する評価が分かれることがわかった。このことから、課題のもたらす効果は参加者自身の動機づけやニーズと関連している可能性があると考え、X年度は参加者のニーズを把握すべく事前アンケートを実施した。アンケート項目としては、試みとして自意識尺度日本語版(菅原, 1984)、及びKiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版; 菊地, 1988)を使用し、「公的自意識」得点「私的自意識」得点ともに参加者平均を下回る参加者を交流群に、①「自意識尺度」の「公的自意識」得点と「私的自意識」得点が、ともに参加者全体の平均(公的自意識得点平均:52.49, 私的自意識得点平均:53.23)を上回る参加者、及び②「公的自意識」得点と「私的自意識」得点のいずれかが参加者平均を上回り、かつ社会的スキル得点(参加者平均:56.43)の高い参加者を洞察群に、各々割り振った。また、グループ分けの際には、日常の大学生活において比較的交流の少ないもの同士が同じグループとなるよう配慮した。その結果、グループサイズが7ないし8名の交流群3グループ(うち1グループはファシリテーター2名)と、グループサイズが5名の洞察群4グループ(うち1グループはファシリテーター2名)の、計7グループが編成された。教官と心理臨床研修員を除く参加者の、事前アンケート下位尺度得点の群別平均値は、表1に示す通りである。また、合宿のタイムスケジュール、及び各群の課題の流れを表2に示す。

表1 事前アンケート下位尺度得点平均値 N=36

	公的自意識得点	私的自意識得点	Kiss-18
交流群	53.78 (9.57)	47.56 (4.89)	53.00 (7.84)
洞察群	52.29 (11.62)	59.53 (5.68)	58.41 (10.04)

( ) 内はSD.

表2 合宿のタイムスケジュール

	第1日目		第2日目	
時	交流群	洞察群	交流群	洞察群
10	大学出発 ↓		朝食	
11			課題Ⅳ 「あれか これか」	課題Ⅳ 「あれか これか」
12			昼食	
13			最終セッション 「あれかこれか」	
14	導入セッション 「Blind Walk」		ふりかえり・アンケート記入	
15	課題Ⅰ 「四つの窓」	課題Ⅰ 「四つの窓」	↓ 大学到着	
16	課題Ⅱ 「NASA」	課題Ⅱ 「108使」		
17				
18	夕食			
19	課題Ⅲ 「大学の中 の私」	課題Ⅲ 「life line, life planning」		
20	ふりかえり・パーティーセッション			
21				
22				

### 6) 各セッションの概要

第1日目に導入セッションとグループ・セッション1・2・3、第2日目にグループ・セッション4と最終セッションを実施。グループ・セッション1及びグループ・セッション4は両群で共通の課題を実施し、導入セッションと最終セッションを合同で実施したが、グループ・セッション2・3では交流群と洞察群とで別々の課題を、各グループに分かれて実施した。

#### a. オリエンテーションと導入セッション

最初に会場内の広場を利用し、合宿期間中の生活上のルール及びセッションに臨む際のルールについて説明した後、予め割り振られたグループの中でペアになり(メンバー数が奇数のグループについては、ファシリテーターが他グループのファシリテーターと組むなどにより対処)、「ブラインド・ウォーク」を野外で実施した。「ブラインド・ウォーク」は、ペアの一方が目隠しをし、もう一方がパートナーの手をとって指定されたコース(階段などを含む)を無言で誘導する課題である。目隠しをする側は当初、周囲を確認できないことへの不安と、他者に身を委ねることへの戸惑いを感じる人が多いが、パートナーの十分な配慮を体感できると不安は次第に低下し、他者に対する信頼を育むことができる。一方誘導する側は、自分

本位のペースで進むとパートナーの足がすくむなどの事態に遭遇し、他者への配慮と他者のペースに合わせる態度とを活性化させることができる。役割を交代して、メンバー全員が両方の役割を体験できたところで導入セッションを終了し、グループごとにコテージに移動してグループ・セッション1を開始した。

#### b. グループ・セッション1

(第1日目, 15:00~16:30頃まで)

グループ・セッション1の課題として、「私の四つの窓—四つの自問—」(行動科学実践研究会, 1976)の一部を改変して使用した。この課題は、メンバー一人ひとりに用紙を1枚ずつ配布し、表3に示す項目を各自記入して他のメンバーに披露し、グループで話し合うものである。日常よりやや踏み込んだ内容の自己紹介の機会を設定することで、各自が自己開示をめぐる逡巡と決断の個人内プロセスを体験したり、傾聴し合うことでメンバー同士の信頼感が育まれたりすることをねらいとした。

表3 グループセッション1「私の四つの窓」の記入項目

<p>④ 順位づけ</p> <p>—— 愛する</p> <p>—— 愛される</p> <p>—— 愛し、愛される</p>	<p>① 私の好きなこと</p> <p>1. 一番好きなアーティスト</p> <p>2. まとまった自由時間にすることが好きなこと</p>
<p>③ 人名</p> <p>1. 家族以外で自分に最大の影響を与えた人</p> <p>2. 本当の賞賛をその人から受けたい人</p>	<p>② 場所</p> <p>1. 肉体的、精神的に死に最も近づいた場所</p> <p>2. 生きる最高の喜びを感じた場所</p>

行動科学実践研究会(1976)を一部改変して使用。

#### c. グループ・セッション2

(第1日目, 16:30~18:30頃まで)

グループ・セッション2は、洞察群と交流群とで異なる課題を実施した。

[交流群]「NASA」(行動科学実践研究会, 1976)の一部を改変して使用した。この課題は、「月で遭難した時」という状況設定のもと、15の物品リストの中で生存のため最も重要と思われるものから、各自順位づけをして他のメンバーに披露し、その後協力してグループとしての集団決定を行うものである。この課題では、集団決定の結果そのものよりも決定に至るまでのプロセスにおける場の力動や、その力動に対する自他の反応の特性に気づ

くことに重点が置かれており、ファシリテーターは振り返りの中でこの側面についても十分に扱うよう、予め指示された。

[洞察群]「108便」(行動科学実践研究会, 1977)の一部を改変して使用した。この課題は、飛行機の7人の乗客のプロフィールを読み、そのうちの4人しか助からない状況で誰が生き残るべきだと思うか、各自順位づけをした上で話し合うものである。この課題を通じてメンバー各自が自身の生きる意味を考えることを促し、自他の考えの共通点や相違点に気づくことにより、自身の持つ価値を明確化することを意図した。

#### d. グループ・セッション3

(第1日目, 19:30~22:00頃まで)

[交流群]「大学の中の私」と題する課題を配し、まずクレヨン・色鉛筆などを使い、大学の中の自分像を自由に描き、披露して話し合う。その後配布された別の用紙の上に「自分」「父親」「母親」「友人」「地域社会」「サークル」などのラベルを配し、各々のラベルの間を関係の質を象徴するような色・太さの線で結び、できあがった社会地図をもとに話し合った。

[洞察群]「life line, life planning」(松原, 1991)を課題として採用した。この課題は、メンバー一人ひとりが配布された用紙上に自分の人生を水平線や曲線で書き表し、生まれてから今日までの人生を振り返るとともに、将来はどうなるかを展望するものである。河村(2000)は、人が自分を確立していく過程の「三つの展開」として、①「自分が感じている過去から現在までの自分の歴史に一貫性がある」とこと、②「多くの時間をともにする集団のなかで、自分の位置がある程度客観的に理解できる」とこと、及び③「社会との関係のなかで、自分の位置がある程度客観的に理解できる」ことを挙げており、人生線(life line)を書くとき「自分の歴史に一貫性をもてるという効果を中心に、自分というものをこの三つの視点で見つめるきっかけにな」と述べている。この線の中には多くの場合、楽しかった思い出のみならず嫌な思い出も含まれており、このような否定的感情をとらえ開示に対して、他のメンバーがどのような個人内プロセスを体験したりどのような動きをしたりするのか(グループ・プロセス)といったことについても、ファシリテーターは細かく配慮しながらグループを運営した。

交流群と洞察群の各々において実施した課題は

異種のもののように見えるが、交流群の課題も自分をとりまく周囲の社会的資源に気づき、それらとの関係の中での自己を見つめ直すことを意図しているという意味において、前述の河村（2000）が提示した「三つの展開」の②と③につながっており、扱うテーマにおいては洞察群の課題と通底する課題設定といえる。

#### e. 第1日目のセッションの振り返りとパーティーセッション（第1日目、22：00～）

各自予め決められた部屋割（同ゼミ・同学年など、合宿以前からの知人が必ず一人は一緒にできるように調整した）に従い、いったん宿泊場所に荷物を移動した後、再度参加者全員が一室に集まり、各グループごとに輪になって第1日目のセッションの振り返りを行った。

グループごとの振り返り終了後、同室内でパーティーセッションに移行した。最初のみ全員が参加し、あとは入浴や就寝のために三々五々抜けてよいこととしたが、実際には半数以上が深夜まで残った。日常の大学生活の中ではさほど交流のない、同じグループのメンバー同士が、パーティーセッションにおいても語らい合う場面が多く観察された。

#### f. グループ・セッション4

（第2日目、10：00～12：00頃まで）

グループ・セッション4は、交流群と洞察群の2つのやや大きなグループに分かれて、「あれか、これか」（行動科学実践研究会、1977）を実施した。これは、2つの言葉のセットを複数用意し、メンバーは各セットの2つの言葉のうちで今の自分にじっくりくる方を選択し、同じ言葉に集まった者同士で選んだ理由や感じていることなどを話し合ったり、違うコーナーに集まった顔ぶれを見ての感想などを話し合ったりするものである。自分の選択した言葉をその都度手元の用紙に記入していき、そのリストを眺めて味わったり、合宿に参加してからのグループ・プロセスを通じて感じたことを表明したりし合うことで、あらためて自己の新たな側面を発見することや、ここまでのセッションにおける自己発見によって揺らいだ自己像を再確認・再統合することをねらいとして、この課題を第2日目に配した。

#### g. 最終セッションとクロージング（終結儀式）、

アンケート記入（第2日目、13：00～15：00）

最終セッションでは、全員が大グループになってグループ・セッション4と同じ課題を実施した。

最終セッションで使用する2つの言葉としては、この合宿での体験を総括するような言葉を選定し、ここでの選択を行うことそれ自体で非日常体験を終結へと向かわせ、再度日常体験へ戻っていくように工夫した。

課題終了後全員が輪になり、グループ・メンバーと、グループ・セッションを通して出会った自分自身の各々に対する別れの言葉を一言ずつ述べ、合宿の全プログラムを終了した。

#### 7) 終了時アンケート

参加学生・院生に対し、①課題2終了まで、②課題3、③課題4及び課題5、④プログラム全体を通して、の各時点を振り返ってもらい、そのときどきのリラックス度、自己開示度、他者に対する尊重・傾聴度、自己発見の程度、他者発見の程度、課題グループのメンバーに対する親密度について評定を求めた。プログラム全体を通しての評定を求める際には、上記項目に加えて研究室学生全体と教官に対する親密度についても、各々評定してもらった。評定は6段階（6＝十分できた／十分親密、1＝ほとんどできなかった／非常に疎遠）。セッション中、他者の重大な開示に出会った際の感想を尋ねる自由記述項目も設けた。さらに、各課題について「楽しいーつまらない」「軽いー重い」「有意義ー意義がない」「またやってみたいーもういい」の4側面から6段階評定を求めた。

### III 結果

回収した終了時アンケートのうち、合宿プログラムの全セッションに参加した大学院生・学部学生計35名分を対象として分析を行った。

課題2終了までの評定平均値を図1、課題3での評定平均値を図2、課題4及び5での評定平均値を図3、プログラム全体を通しての評定平均値を図4に、各々示す。

交流群と洞察群の評定平均値の差を $t$ 検定により検討したが、いずれの項目においても有意な差は認められなかった。また、各時点での評定の推移を見ると、課題2までは両群とも尊重・傾聴度の評定平均値が他の項目の評定平均値よりも相対的に高いが、課題3以降は自己発見度の評定平均値が高くなり、この傾向はプログラム全体を通しての評定まで維持されていることがうかがえる。

各課題に対する評価に関しては、導入セッションに対する評価の評定平均値を図5、課題1の評定平均値を図6、課題2の評定平均値を図7、課

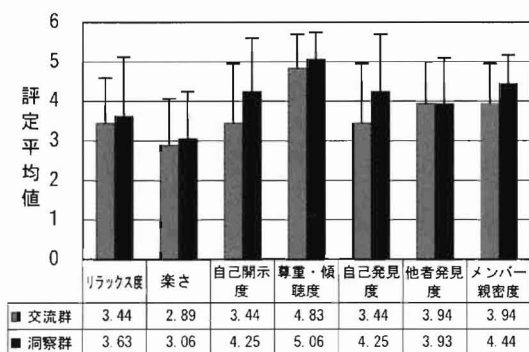


図1 課題2までの評価平均値

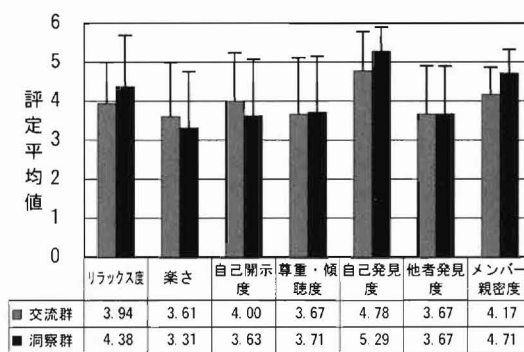


図2 課題3の評価平均値

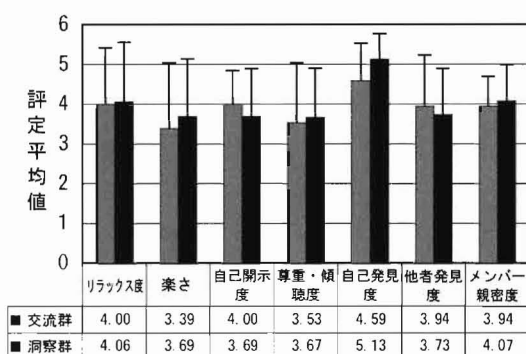


図3 課題4・5の評価平均値

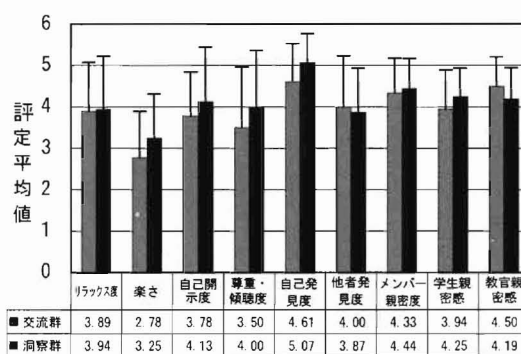


図4 全体を通しての評価平均値

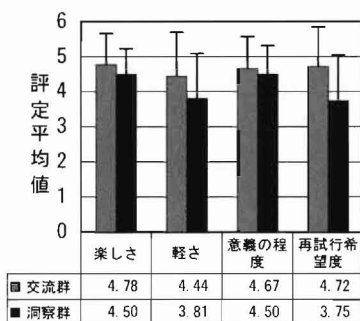


図5 導入セッションに対する評価

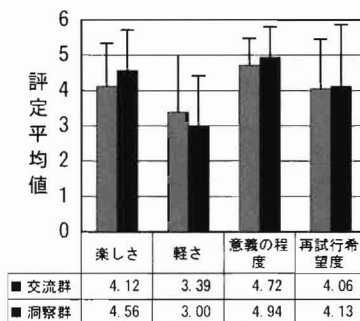


図6 課題1に対する評価

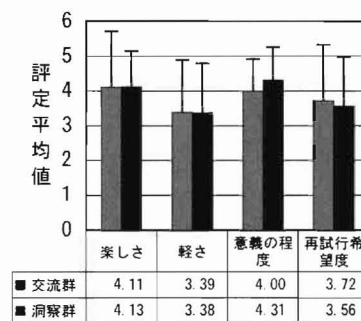


図7 課題2に対する評価

題3の評価平均値を図8、パーティーセッションの評価平均値を図9、課題4の評価平均値を図10、課題5の評価平均値を図11に、各々示した。交流群と洞察群の評価平均値の差を $t$ 検定により検討したところ、導入セッションに対する再試行希望度において有意な差が認められ ( $t(32)=2.34$ ,  $p<.05$ )、「ブラインド・ワーク」に対して、交流群の方が洞察群よりも「またやってみよう」と評価している。

他者の重大な開示に出会った際の感想を記述したのは、35名中26名であった。このうち、①他者の開示によって感情の揺さぶられる体験や、戸惑いに言及した者（「つらかった」「聴いていて、自

分も気持ちが苦しくなった」「とまどった」など、否定的感情を報告した者）が7名、②他者の開示内容に対する共感や開示することそのものに対する支持、他者の開示により自分が支えられる体験に言及した者（「共感できた」「話すことに抵抗があったらうによく頑張ったなと思った」「自分と似ているところがあって安心した」など、肯定的感情を報告した者）が9名、③その場で自分のできるものの限界を知りながらも、精一杯傾聴しようと努めたり、自分の身に置きかえて他者の体験を内面化しようと努めるなど、開示に出会った際の自分の姿勢に言及した者（「とにかく聴こうと思った」「自分とその立場だったらどうするのだろう

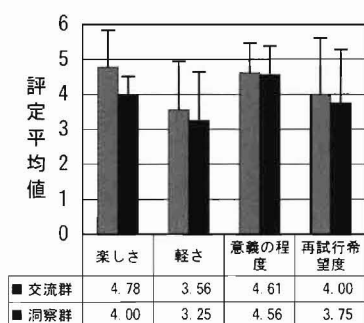


図8 課題3に対する評価

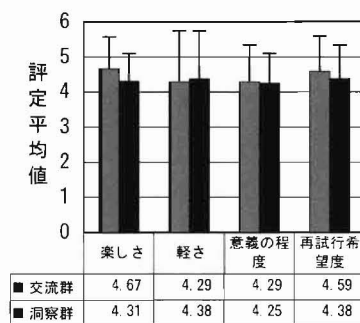


図9 パーティーセッションに対する評価

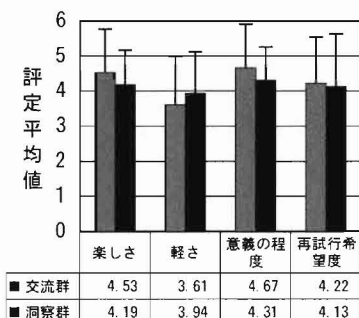


図10 課題4に対する評価

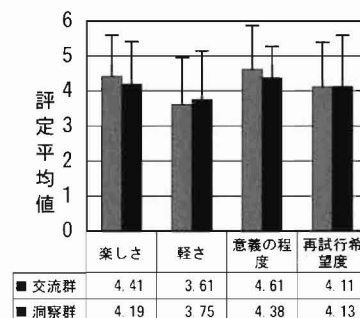


図11 課題5に対する評価

と深く考えている自分に気づいた」といった報告をした者)が4名いた。上記3分類に入らない記述は5名分あったが、これらは「人にはいろいろな経験があるのだと思った」「そのような考えをしている人もいるのだと感心した」など、新奇の体験をしたという事実そのものの記述に近いものや、「誰でもそういう部分はある」と開示内容を客観的な視点で一般化するものであった。

#### IV 考察

##### 1) エンカウンター・グループと参加者の自己発見度

終了時アンケートの結果分析を通して、今回の合宿プログラムが参加者にどのような体験を提供したのかという点について、まず検討する。

X年度合宿プログラムの特色は、交流系課題グループと洞察系課題グループの2種類のプログラムを用意した点にあること、しかしながら、2種類のプログラムのいずれもが、自己の未知の側面の発見を促すことを目標として企画されていたことについては、先に述べた通りである。終了時アンケートの、複数の時点を振り返っての評定平均値(図1～4)について、交流群と洞察群の差を検定した結果では、いずれの項目においても有意な差は認められず、上記2群が異なる体験をしたとする根拠は見出せない。この意味において、両群

に同じような体験を用意しようとした企画の意図に、一定の水準まで合致した結果が得られたと考えられる。

また、課題2までの評定平均値では、他者に対する尊重・傾聴度が他の項目よりも相対的に高いものの、課題3以降は一貫して自己発見度の評定平均値が他の項目よりも相対的に高い値となっていることから、自己発見は参加学生にとってエンカウンター体験の重要な一側面であったことがうかがわれる。課題3以降の自己発見度の評定平均値は、交流群・洞察群ともに4.5(4—ややできた、5—かなりできた)を上回る値となっていることから、自己発見を合宿プログラムの成果として挙げて差し支えないであろう。

1泊2日という、決して長いとはいえない時間内で実施されたプログラムであったにもかかわらず、他者の重大な開示に出会った際の感想からは、参加者の多くがグループ体験に没頭していた様子をうかがい知ることができる。限られた時間の中で、学生の多くにとって濃密な未知の自己との出会い体験を用意することを考える際に、エンカウンター・グループの手法は有効な手立ての1つと考え得る。

##### 2) 自己を揺さぶられる体験と自我同一性地位

エリクソン、E.H. (1959) は、人生を8段階に分け人格発達を理論化した漸成的発達理論の、5

番目の段階である青年期の発達課題として自我同一性達成を挙げている。この自我同一性を選びとることが青年期の重要な主題であるとされており、自我同一性を選びとる意思決定の期間は危機(crisis)、選択肢を前にして途方にくれた状態は拡散(diffusion)と、それぞれ呼ばれる。エリクソンは危機という言葉に成長に向けた積極的な意味を付与しており、同一性地位の概念を提起したMarcia (1966) も、危機の経験と、選びとった職業やイデオロギーに対する積極的関与(commitment)の有無とを分類の枠組として提唱している。Marciaの分類によると、危機を経験し、かつ積極的関与を行っている場合を、自分の決定によって人生を歩んでいるタイプとして「自我同一性達成型」と判定するのに対し、危機を経験せずに積極的関与を行っている場合は、自分の目標と周囲の目標との間に不協和のないタイプとして「早期完了型」と判定し、今後危機を経験することにより自我同一性拡散に向かう可能性を示唆している。

対人援助職である教員や心理専門職を志望する学生の中に、危機や拡散を体験しないまま受験に臨み、進学してくる学生が多いことについては、先に述べた。豊嶋(1992)によると、地方国立総合大学学生における自我同一性地位の調査で、入学直後の時点で自我同一性を達成しているとみられるものは8.3%にすぎず、教員養成学部でもこれとほぼ同じ数値を示す。また、さらに新しい豊嶋(1995)のデータでも、自我同一性達成者は7.7%にとどまる。一方で、対人援助職を目指す学生の中には、きわめて強固に進路志望を固めている者がみられるが、こういった学生の中には、上記の「早期完了型」に属する者も多数存在すると思われる。

危機を体験して自我同一性を選びとる作業は、大学入学以降の課題になっているとみるのがより現実的である。教員や心理専門職と同じく対人援助職である看護職を志望する、看護学生を対象とした横断的研究において、志望動機得点は1・2年次よりも3年次でむしろ低く(齋藤ら, 2000)、縦断的調査によって得られたPIL (Purpose in Life Test: 人生の意味・目的意識を調査する質問紙検査)得点も、1年次よりも2・3年次で有意に低いという結果が得られている(齋藤ら, 2001)。これらのデータも、対人援助職に対する明確な志望を持って入学した学生の多くにとって、危機体験と

危機を通じての自我同一性達成が入学後の作業であることの傍証とみることができるであろう。

このような作業が大学在学中になされなかった場合、結果はむしろ悲劇的である。「早期完了型」で入学した学生が、危機を経験しないまま卒業を迎え、実際にその職業に就いた後に初めて危機を迎えるということは、学生本人にとってもその援助対象者にとっても重篤な事態をもたらす可能性がある。その意味において、教授や対人援助にかかわるスキルアップの一方で、学生の自我同一性達成までを標的に定め、危機を通して自我同一性達成へと向かう体験をあえて対人援助職養成カリキュラムの中に用意することは、学生自身の人間的成長を保証し、職業的同一性の根を準備するための養成機関の重要な任務であると考えられる。

## V おわりに

今回のデータでは、自己発見の量的側面が中心的に取り上げられ、その質的側面にまでは調査の手が及んでいない。あらゆる発見がこれまでの自己イメージの書き換えを迫るであろうことは想像に難くないが、危機という視点で考えた場合には、これまでの自分の価値では受け入れがたい発見こそが重要な意味を持つと考えられる。この点で、自己発見の参加者自身にとっての意味など、質的側面を把握するとともに、その発見を通じて参加者にどのような変容が生じるのかということについて、追跡的に検討を加えていくことが今後の課題となろう。また、危機体験の機会を提供したのち、危機に直面する学生を側面から支え、自我同一性達成へと向かうプロセスをいかにして促進(facilitate)するかということについても、より実践的な研究を行う必要があると思われる。

## 文 献

- エリクソン, E. H. 1959 小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房.
- 花屋道子・小森(立原)聖子・加川真弓・豊嶋秋彦 2002 研究室コミュニティに対するグループ・アプローチの適用, 弘前大学保健管理概要, 第23号, 36-43.
- 河村茂雄 2000 心のライフライン—気づけなかった自分を発見する— 誠信書房.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店.
- 行動科学実践研究会(編) 1976 Creative O. D. 人間ののための組織開発シリーズVol. 1, Press

Time.

- 行動科学実践研究会（編）1977 Creative O. D. 人間のための組織開発シリーズ Vol. 2, Press Time.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 松原達哉 1991 第13回 自己開発のための合宿セミナー報告書 筑波大学保健管理センター.
- 小柳晴生 1991 エンカウンター・グループ 現在から未来へ 村山正治・見藤隆子・野島一彦・渡辺忠（編）「エンカウンター・グループから学ぶー新しい人間関係の探求ー」201-217, 九州大学出版会.
- 小柳晴生 1999 学生相談の「経験知」ー大学における心理臨床ー 垣内出版.
- ロジャーズ, C. R. 1970 畠瀬稔・畠瀬直子（訳）1982 エンカウンター・グループー人間信頼の原点を求めてー 創元社.
- 齋藤和樹・丸山真理子・小林寛幸・花屋道子・柴田健 2000 看護学科の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性の関連について（Ⅱ），日本赤十字秋田短期大学紀要，第5号，43-47.
- 齋藤和樹・小林寛幸・丸山真理子・花屋道子・柴田健 2001 看護学生における人生の意味・目的意識ーPILのパートAの縦断的分析ー，日本赤十字秋田短期大学紀要，第6号，9-18.
- 菅原健介 1984 自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み，心理学研究，55，184-188.
- 豊嶋秋彦 1992 集団・学級・文化づくり 菊池武剋・清俊夫（編）「子どもの発達と学校生活」110-124，新曜社.
- 豊嶋秋彦 1995 大学生期の発達課題をめぐって 第28回 全国学生相談研究会議（旭川シンポジウム）報告書11-14.